（独）農畜産業振興機構
畜 産 業 振 興 事 業

飼料増産ホットニュース

第 57 号　2009.10.15
発行者　全国飼料増産行動会議事務局
事務局　（社）日本草地畜産種子協会
〒104-0031 東京都中央区京橋 1-19-8
大野ビル
TEL 03-3562-7032　FAX 03-3562-1651
http://souchi.lin.gr.jp/

放牧

農場リース事業を利用した新規就農者による酪農経営

（第１３回全国草地畜産コンクール（社）日本草地畜産種子協会長賞受賞事例）

重点地区

社団法人　日本草地畜産種子協会　事務局

１　北海道野付郡別海町の概要

社団法人日本草地畜産種子協会長賞を受賞された穴吹　威氏の住む北海道野付郡別海町は、北海道の東端に位置し、丘陵地帯に広がる牧歌的景観、東にオホーツク海からの豊かな水産資源など自然に恵まれており、広大な土地資源を背景に大型酪農地帯として発展し、酪農家戸数 900 戸、乳牛飼養頭数 12 万頭、年間出荷乳量は 43 万 t で北海道の 12%を占める酪農生産日本一を誇るまちです。

２　経営の概要

穴吹さんの経営は、経産牛 53 頭、草地面積 48 haの酪農専業経営です。平成 6 年に農場リース事業を活用して新規就農しました。当初から土づくり・草作りに取り組み、平成 11 年より本格的に放牧酪農を開始しました。「酪農は国民の食料生産を行う仕事であり、良質な生乳生産を通じて消費者に還元できる営農に取り組む」ことを目標に掲げ、牛のストレスが少ない放牧酪農を実践しています。

現在、奥さんは家事、育児に専念しているため、基幹労力は主人一人となっています。経営分析は会計事務所に委託し、繁殖のコンサルを受けるなど(平均分娩間隔 13.1 ヵ月)、外部支援組織を有効に利用しています。また、仕事が過重気味の年は公共牧場を利用するなど労力の軽減に努めています。

放牧風景

コンテンツ：

●農場リース事業を利用した新規就農者による酪農経営・・・・・・・・・・・・・・・１頁
●小区画分散圃場で自給飼料生産に取り組む酪農＋肉用牛繁殖経営・・・・・・・・・３頁
●事務局より・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４頁

放牧牛乳が本来の牛乳との考えから、平均乳量は 7,163 kg/頭程度、所得率 29.7%、乳飼比 22.9%、粗飼料自給率（TDN 換算）73.7%、飼料自給率（TDN 換算）60.3%で、後継牛は全て自家育成し、特に季節分娩向きの牛群整備に努めています。

３　草地・放牧地管理

放牧地 22 ha、採草地 5 ha、採草放牧兼用草地 21 haの合計 48 ha、全て自己所有地です。採草放牧兼用草地は 1 番草収穫後放牧に利用しています。放牧期間は、5 月～12 月までです。草地は大牧区による昼夜放牧方式で 1 牧区 1 ～ 7 haの 12 牧区に区画し、搾乳牛全頭を 1 群として、12 牧区を 10 日で一巡する方式で輪換放牧を行っています。また、放牧草の栄養価の高い時期に泌乳ピークを合わせるため、季節分娩（3～5 月）を行っています。

ブリーディングカレンダー

平成 10 年から土壌診断を民間の草地コンサルタントに依頼し、処方箋に基づいた施肥管理を行なっており、シロクローバの多い短草型草地で植生は良好です。採草地 5 haと採草放牧兼用地 21 haの 1 番草はコントラクターに委託してバンカーサイロでグラスサイレージに調製し、採草地の 2 番草は自らラップサイレージに調製しています。

自給飼料生産コストは 27 円/TDN/kgとなっています。Nの年間施用量は放牧地、採草地、兼用地、それぞれ 5 kg/10a 程度です。草地の更新は、当初は補助金を活用して完全耕起を行っていましたが、現在は植生を見ながら追播による簡易更新を行っており、土壌診断による施肥管理を行うことによって嗜好性が良い草地となり、牧草から一定の乳量の生産を期待でき、草勢も良好に保たれています。

クローバーが多い短草型草地

４　ふん尿利用（環境対策）

ふん尿は堆肥舎で発酵処理後、完熟堆肥をスカベンジャー（堆肥運搬散布専用車）で春と秋に採草地に、放牧地には夏に施用し、洗浄水は浄化処理後放流しています。半年間は放牧のため堆肥生産量は不足気味であり、過剰施用や環境問題の発生はありません。

５　経営の特徴

消費者へ適正な価格で生乳を供給することや、環境に対しても高い意識を持った酪農理念の実践には学ぶ点が多く、現在、労働時間が長いなどの課題もありますが、新規就農から僅か１５年間の短期間で着実に経営成果も上げており、農場リース事業を利用した新規就農者による酪農経営事例であります。

放牧酪農に取り組むことにより、経営を有利に展開できることを実証しており、普及性が期待される事例です。

環境に配慮し自宅へ太陽光発電

とうもろこし作付け拡大

小区画分散圃場で自給飼料生産に取り組む酪農＋肉用牛繁殖経営

（第１３回全国草地畜産コンクール（社）日本草地畜産種子協会長賞受賞事例）

社団法人　日本草地畜産種子協会　事務局

１　茨城県久慈郡大子町の概要

社団法人日本草地畜産種子協会長賞を受賞された戸辺久一郎氏の住む茨城県久慈郡大子町は、茨城県の最北西端で、北は八溝山系を境に福島県、西は栃木県、東は茨城県常陸太田市、南は茨城県常陸大宮市にそれぞれ境を接しています。

東西 19km、南北 28km でやや南北に長いほぼひし形の形をしています。総面積は 325.78k ㎡と県全体の約 20 分の 1 を占める広大な町です。

面積の約 8 割は、八溝山系と阿武隈山系からなる山間地で年間平均気温は 12.5℃、年間平均降水量は 1,400～1,500mm と低温多雨の山岳気候の地域です。

２　経営の概要

戸辺さんの経営は、本人と父母の 3 人で乳用牛の経産牛 44 頭と和牛繁殖牛 5 頭を飼養する酪農＋和牛繁殖経営です。中山間地域での自給飼料基盤に立脚した酪農経営を展開するため、狭小なほ場等で飼料用とうもろこしの栽培と安定的なサイレージ利用体系を構築しています。

経営耕地面積は、4.2ha でうち借地面積は 3.2ha と借地依存率が 76%を占めています。飼料作物作付け面積は 5.7ha となっており、耕地利用率は 136%と高いものとなっています。大子町は耕作放棄地率が 35%と高い中山間地域ですが、そのような中で耕作放棄地解消に大きな役割を果たしています。経営耕地面積 4.2ha は 41 区画からなっており、小型機械による播種、収穫、簡易サイロ詰めを行っています。粗飼料の自給率は 46.0%で、地域の平均 10%を大きく上回っています。

和牛繁殖に取り組んだ契機は、20 年前の地元の大子一高農業科の廃止計画が話題になった時、その存続をかけて父・久夫氏が大子町受精卵移植研究会を組織して自らが会長となり、受精卵移植に取り組んだことに遡ります。

この取り組みは、畜産経営への寄与や地元和子牛市場の活性化に貢献しています。

３　飼料生産

農地に対する所有意識の強い地域にありながら、地権者の協力を得て農地を拡大し、飼料用とうもろこしを中心に作付けしています。最近は、冬作として極早生えん麦等を導入するなど飼料増産にも取り組んでいます。作付け作物は、飼料用とうもろこし 4.2 ha、飼料用カブ 20 a 、えん麦 1 ha、ライ麦 30 a です。飼料用とうもろこしの収量は 10a 当たり約 6t と高い収量を上げています。

圃場位置図

飼料畑は 41 区画という狭小ほ場のため、高能率の収穫作業ができないので、とうもろこしの品種と播種期に幅を持たせることにより、収穫期の集中を避け、適期収穫に配慮して 4 品種を作付けしています。また、イノシシの被害防止のため、電気牧柵を利用しています。

イノシシ被害防止用電気牧柵の設置

播種、収穫はテーラー式の小型機械や牽引式フォーレージハーベスタ（１条刈り）の小型機械体系で実施しています。収穫物の搬送はトラックで行い、ブロック製の小型角型サイロや簡易鉄板サイロを用いてサイレージを調製しています。肥料は堆肥を中心に施用していますが、カリが高めで、苦土が低いなど問題もあることから、エンバク等の冬作の作付け体系の中で、施肥方法の改善に取り組んでいます。

４　ふん尿利用（環境対策）

牛舎のふん尿は固液分離され、固体部分はもみ殻、稲わら米ぬかを加えてロータリー式撹拌機で混合処理を行い完熟堆肥を生産しています。堆肥舎は山あいに設置し、撹拌時以外は臭気を発生させないように留意しています。また、堆肥舎周辺のヒノキ林を購入して、水質保全、美観、臭気拡散防止対策に務めています。液体部分は、軽トラックの荷台に載せたタンクで運搬し、圃場に散布しています。堆肥の品質は評判が良く９割以上が大子町の主要産物である米、リンゴ、野菜、コンニャク生産農家に供給され、“地元の堆肥で作った”をキャッチフレーズにしたブランド米「奥久慈米」や「奥久慈」を冠したリンゴ、野菜の生産に寄与しています。

５　経営の特徴

小区画分散ほ場で獣害が多い不利な立地条件下で、飼料用とうもろこしの品種選定と播種期の工夫で適期収穫を可能にし、電気牧柵利用で獣害を回避し、冬作のエンバク類の栽培も取り入れるなど、飼料自給率の向上に取り組んでいます。また、大子町・常陸大宮市地域の若手後継者クラブ「ファーマーズ９９」の副会長として活躍しており、さらに今年２月の県プロジェクト発表会では、「自給飼料を見直そう」と訴えて準優勝をするなど地域から期待される若手経営者と評価されています。耕作放棄地の解消、土地利用率の向上、単収向上などの諸問題に多数のヒントを与える模範的事例です。

事務局より

《肉用牛放牧現地検討会の開催について》

❒ 肉用牛放牧現地検討会を 10 月 22 日栃木県大田原市で開催します。詳細については、当協会ホームページをご覧下さい。

《北海道・東北ブロック公共牧場長研修会の開催について》

❒ 北海道・東北ブロック公共牧場長を対象に研修会を 10 月 29 日～30 日北海道帯広市及び浦幌町で開催します。詳細については、当協会ホームページをご覧下さい。

《飼料用米利活用シンポジウムの開催について》

❒ お米を飼料として使った畜産物の普及を目指して、来る 11 月 4 日さいたま市で「飼料用米による地域農業の可能性」と題し、農林水産省関東農政局との共催により、シンポジウムを開催します。詳細については、当協会ホームページをご覧下さい。

《公共牧場技術職員研修会（九州ブロック）の開催について》

❒ 九州ブロック公共牧場技術職員の皆様を対象に電気牧柵利用による集約放牧技術の研修会を 11 月 10 日熊本県産山村で開催します。詳細については、当協会ホームページをご覧下さい。

《飼料増産重点地区への登録のお手伝いをします。》

❒「飼料増産重点地区への登録のため、当協会では飼料増産に関する研修会、現地指導等について講師を派遣しています。詳細については、当協会ホームページをご覧下さい。